

龍神まつりの歴史

今の龍は3代目って知っていますか？

県外からのお客さんも来る龍神まつり。その主役の龍は迫力がありませんね。でも現在の龍は3代目って知っていますか？

御代田のまつりに、龍が初登場したのはいつなのでしょう。今回、意外と知られていない龍神まつりについて、なつかしい写真とともにお伝えします。



昭和54年祇園祭に龍が登場した様子

龍神初登場

龍神まつりは佐久地方に古くから伝わる「甲賀三郎」の伝説が元になっています。

この伝説をもとにして、昭和54年青少年団体連絡協議会（町内の若者を中心に会員の友情と連帯の輪を広めようと発足）の会員と商工会青年部が協力して、休日や夜に集まってビニールパイプや布切れで全長20mの手作りの龍神を作って、祇園祭（栄町区）の会場に持ち込み、芝居を披露しました。このとき、御代田のまつりに初めて龍神が登場しました。当時の記録で関係者の方は「こうした活動を通じて、俺たち若い者が、もつと真剣に御代田町を考えなければいけないんじゃないか、という意見が出てくるようになった」と話しています。そして、昭和57年から「竜神夏まつり」として、御代田のまつりが新たに再出発したのです。最初の3年間は観光協会の主催でしたが、その後「龍神まつり」として町民参加のまつりに発展してきました。30回の節目には、舞姫と二頭の子龍が誕生しました。

現在の龍は3代目

現在の龍神は3代目で、長さは45mあり、町のシンボルとして、様々なイベントで活躍しています。

平成10年には長野冬季オリンピックのユースキャンプに、龍神太鼓保存会「鼓響」と参加しました。また長野冬季パラリンピック閉会式にも出演し、世界に向けて御代田のまつりが披露されました。

龍の舞保存会発足

平成4年10月には、会員相互の親睦を図り、舞の研究を通して町民まつりの活性化と町民とのコミュニケーションを深めることを目的に「龍の舞保存会」が発足されました。

現在、保存会会員100名程が、一年を通じて舞の更なる演技向上にまい進し、福祉施設など全国各地にてイベント活動を行っています。

保存会では、一年を通じて活動できる会員（仲間）を募集しています。男女問わず高校生以上（16歳以上）の興味のある方はご連絡ください。信州みよた龍の舞保存会

会長 重田 嘉一（32）6404

御代田町のまつり町民がどう参加するのか

長野冬季パラリンピック閉会式に参加をして、龍神まつりは全国的に有名になりました。現在は県外からもお客さんが来るようになり、毎年大勢の方にまつりを盛り上げていただいています。

しかし、観客が増えることにより規模が大きくなり、捨てられるごみの問題や、町民がまつりにどのように参加するのが問われてきました。また、こんな声も聞きました。子龍は小学生、龍神は高校生以上から参加となっているので、中学生が舞う場がない。

龍神まつりをより活性化するため、町民の皆さんからのご意見がありましたら、龍神まつり実行委員会にご連絡ください。

問い合わせ先

龍神まつり実行委員会

（役場産業経済課商工観光係）

（32）3111（内線31・62）

今年の龍神まつりの様子は、12・13Pをご覧ください。

初代龍神 現在の龍神とは頭の持ち方も違います。



2代目龍神 現在の龍神に近づきました。

龍神まつりの歴史

昭和46年

第1回 観光夏まつり

昭和54年

青少年団体連絡協議会会員と商工会青年部が協力して手作りの龍神をつくり、祇園祭に参加。

昭和57年

竜神夏まつりと装いを新たに開催

昭和61年

龍神まつりとして開催

平成元年

3代目龍神誕生

平成4年10月

龍の舞保存会設立

平成5年

信州博覧会(松本市)に子どもたちと参加

平成10年

長野冬季オリンピックピックユースキャンプと、長野県冬季パラリンピック閉会式(Mウエーブ)に参加

平成14年

第30回龍神まつり
舞姫(中龍)初登場
雪悉丸・龍神丸(子龍)も登場

平成17年

S/O冬季世界大会閉会式参加

真楽寺大沼の池

甲賀三郎伝説

昔、甲賀太郎・二郎・三郎の三人の兄弟があつた。末弟の三郎は、大変正直で勇気があり、頼もしい若者だったので父の遺言どおり家のあとを継ぎ、美しい姫を妻にむかえて幸福な生活を送っていました。そんな弟を兄たちは羨み、姫を横取りしようと計画をたてました。

ある日、兄たちは三郎を誘って蓼科山の山奥にある人穴に連れて行き、その穴の中にある貴重な宝物を取ってくるように命じました。正直な三郎は、兄たちの詐欺りだとは知らず、藤のツルにつかまって穴の中へ降りて行くと、兄たちが途中でツルを切ってしまったので、三郎は深い穴の底へ落ちてしまいました。

記憶を失った三郎は、地下をさまよい歩いたすえに、見知らぬ美しい村にたつた。三郎はその村でむこ入りをして子どももできました。ある日、地上のことを思い出して涙を流す三郎を見て、一度は地上のことは忘れるよういさめた妻も、三郎の気持ちをよくんで、旅の仕度を整えてやりました。こうしてけわしい苦しい旅を続

けていると、ある日かなたにかすかな光がさしてきました。まもなく子どもたちのはしやぐ声が開えてくるではありませんか。三郎は懐かしい地上へ頭を出しました。そこは浅間山のふもと、真楽寺の大沼の池のはとりでした。ところが、三郎が喜んで体をのり出すと、子どもたちが、「龍が出た怖いよ」と言つて逃げていきました。その声におどろいた三郎はすんだ池の水に自分の姿を写してみると、たしかに自分の体が龍に変わっていました。

悲しみのあまり黒雲をよびおこし、狂つたようにふるさとの妻の名をよぶと、はるか西の諏訪湖あたりが明るくなって、三郎にこたえるなつかしい妻の音が聞えてきました。妻は、姿が見えなくなつた三郎をさがし求めたすえに諏訪湖に身をすずめて龍になつていたのです。龍になつた三郎は、龍になつた妻と、ようやく諏訪湖めぐりあうことができ、諏訪湖の底でくらしたいという。この民話は、「諏訪大明神御本地縁起」などによる。